

[原著論文]

内モンゴル大学における日本語教授法の改革の試み －初級日本語の指導を中心に－

張 紅賢*

Tentative Reform in the Japanese Language Teaching methods in Inner Mongolia University －Based on the Japanese Teaching for Beginners－

Hongxian ZHANG*

Abstract

Since Inner Mongolia University started the teaching of the Japanese language as a major 30 years ago, quite a lot of excellent Japanese majors have graduated from this university and played important roles in all walks of life. In spite of these tremendous achievements, the Japanese teaching is confronted with problems too. High priority should be accorded to such aspects as the pronunciation of the beginners, the better comprehension of an alien culture, communication and performance of Mongolian students in class, and etc. only if the Japanese teaching keeps in pace with the present demands, faces up to the current problems, looks to the future and keep on learning and reforming, can Japanese as a major progresses well and Japanese majors have a bright future.

KEYWORDS : beginners, teaching methods, reform

1, はじめに

中国でも、日本でも教育改革を呼びかけている。「改革」といったら、古いものを捨て、新しいのを作り出すことで、単に専門化により作り出したいくつかのコースのようなものにしたがっていくものではない。個々の教育対象に合い、喜ばれるのが真理である。教育改革を深めることは教授と詰め込みを主とする伝統的な教育パターンを打ち破ることである。学生たちは自発的に参加し、師弟相互、探究創造するモデルを新たに構築することである。このようにして初めて新しい時代に適応する有能な人材を育成することができる。

これは新しい時代の教育改革において重点を置くべきである。さもなくば、形式だけを変え、内容を変えない不具合な状態に陥るだろう。これは第一線の教師が精力を注ぐべきであり、授業において我々は学生一人一人の違いに合わせて、学生に表現させる機会を与えるべきである。

内モンゴル大学は1957年に設立され、中国少数民族地区の中で最も早く設立した総合大学であり、日本語教育が1979年に始まって一番早くスタートした教育機関でもある。33年間にわたって、各分野で活躍している数多くの日本語人材を育成した。その一方、新鮮な血液、つまり新しい教授法が不足しているのも

* 内蒙古大学外国語学院

* Foreign Languages College of Inner Mongolia University

目立つのである。日本語教師としての訓練を全く受けずに教壇に立っている日本人がたまたま見かける。本稿では内モンゴル大学における日本語学習者に対する教授法の改革について授業実践を中心にし、検討していきたい。

2. 問題点と改善法

1) 初級段階の発音に注意すべき

内モンゴル大学では日本語学科の学生が卒業する際、卒業論文を完成し、その後答弁しなければいけない。毎年卒業生の論文答弁が非常に重要な仕事でもある。勿論、この仕事に数多くの問題が存在していると思うが、私の印象に残ったのは学生の発音である。最近の教授法では、発音等はあまり矯正しないとされているが、初級段階で身につけた間違い、特に発音は後になってからでは矯正しにくい。四年間外国語学院日本語学科で日本語を専攻したとしたら、国際日本語一級がパスできたかどうかは別として、口をあけると綺麗な日本語が流れるかどうかは重要である。経験をつんだ日本語教師であれば、外国人の使う日本語を聞くと、その人が初級段階にきちんとした日本語教育を受けたか、自己流の独学で学んだかは大体推察できる。いつも先生のリズムに乗って、マネをしていく学生もいれば、自分のまま進んで、先生の矯正をほとんど気にせず、変な発音で話す学生も偶々いる。

2) 学習者に満足感を与える

学習者に自分が何かを学び取ったという満足感を与えることは、学習意欲を高めるのに役立つ。それには、各授業毎の到達目標をあまり多くせず、その日に学習したことを出来るだけ学習者自身が使える段階にまでもっていくようにするとよい。①筑波大学教授の石田敏子が著した「日本語教授法」にあるように、初級段階の学習者に満足感を与えなければならない。これをしないと、毎日の授業が終わって、何ができたかの自信も持てない。これは最新の理論ではないが、二十年の教授経験のなかで相当役に立つといまでも私は強く感じている。周知のごとく、どんな有名人教師の授業においても権威が存在しない。教師は単に一人のガイドのように、永遠に何でも解決できる万能ではない。同時に各々の学生が学習に参加し、学習によって作られる評価、議論の権利を有する。学生全員はPRし、自分自身の能力を育成する権利を持っている。これこそ初めて本当の学習といえる。これは私たち教師と

わけ新入生を教える教師に対して提案する新しい課題である。学生が自発的に学習する精神を刺激し、学生が挑戦する意識を培い、人々の多方面にある素質を総合的にさらに高める。各々の学生にこのような雰囲気の中で、学習の喜びを体得させ、学習の満足感を享受する。

3) 学生の態度や表情を重視する

分かったか分らなかったか、面白いかつまらないかななどの反応を得ながら授業が進められるので、教える側は非常に助かるし、張り合いもある。②大学に入ってから、外国語を専門として勉強する時はやはり「ゆとり教育」がいいと私は思っている。「なぜ」を問わず真似することは大事である。母語を覚えるのと同じで、発音やアクセントを自然に真似をしてやらせ、一定の段階になると、文法的に入るのも相当役に立つと思われる。特に「ゼロ」から学習する学生は日本語を全く知らない。彼らは教師を通じて、日本語のいくつかの特徴と日本人の習慣風俗及び拘りを徐々に理解すべきである。他言語母語話者と比べ、モンゴル語母語話者クラスの成績はきっと優れていると考えがちであろう。実はそうではない。卒業するまでの成績は中国語母語話者クラスより相当劣っている感じがするのは不思議である。内モンゴル大学では、今日まで、およそ10年以上モンゴル語母語話者の学生を募集し、毎年三十人ぐらいが日本語を専攻している。モンゴル語話者にとって、日本語は発音や語順など、非常に近いといわれるが、最後の成績と進路からみれば、中国語話者学生より、弱いとみられる。なぜだろう。よく考えてみると、学生側の原因もあれば、教師側の原因もある。ここで、教師側の問題を探してみたい。

a、モンゴル語話者学生の授業を担当している教師は大多数が中国語話者である。モンゴル語話者の教師はもちろんいる。しかし、ほとんどは中国語で教える。なぜなら、ずっとモンゴル語を使うと、卒業するとき、これらの学生に考えられない困難が出てくる。つまり、就職の問題である。中国語が上達しない。面接を受けると、合格率は低い。では、どうすればいいだろうか。一つは教師としてどうしても学生の表情を重視すべきである。理解したかどうかをよく判断してから、話してもらったり、聞いてもらったりして確認する。もう一つは、モンゴル語話者学生を中国語話者学生のクラスにいれて授業をする。中国語話者学生とのコミュニケーションを増やす。これは、最高の方法ではないが、試してやる価値がある。

b.授業中、あまり反応しない学生を重視すべきである。

授業を担当している教師の90パーセントは中国語話者なので、モンゴル語話者クラスの学生の反応もいろいろ違ってくる。注目しないと、脱落していく学生がいるのである。なぜかという、モンゴル語話者クラスの学生は、授業の内容を分かったか、分らなかったかあまり顔に出さない。それに、一つの問題を何回繰り返しても気にしない学生が相当いる。理解が不十分の段階で会話にも自信がないまま、口を開けるのも困難である。それで、教師が学習指導要領を十分準備、調整する必要はあると私は思っている。必ず、学生の様子に重点を置くべきである。

自主的に考えさせ、自分自身でしたり、話したりする機会をあたえる。所謂授業参加意欲を最初に持つようにしなければならない。説明を与えすぎない。最小限の説明で、短時間内に効果を上げる方法を工夫したほうがいだろう。

4) 媒介語の使用

日本語教育の場合、学習者の母語が使えるとは限らない。また、母語の使用は避けるべきであるという主張もある。過度に依存するのは戒めるべきであるが、時間の経済性や学習者の理解度等から判断して、母語または媒介語を使用した方が効果的と認められる場合には使った方がいい。③学習者の積極的な参加を促すには、学習者が間違いをするのを恐れぬような雰囲気を作り出すのが一番である。誰でも始めから正しい日本語ができればクラスに来る必要はないことを前提として、講義を進めたほうが効果的である。

3, 教授法の改革の必要性

内モンゴル大学の日本語学科は歴史が長く、一貫したカリキュラムが数年間の模索で評価されるようなものになった。しかし、それはモンゴル語母語話者学習者を対象として作られたものではなく、すべての学習者に適用するものである。モンゴル語母語話者を募集する仕事も十数年経ち、それに適応するための改革は緊迫している。これらの学生の中には入学当初、中国語さえもろくに話せない学習者も相当存在している。中国語母語話者の学習者と同じカリキュラムで要求されるのは適当ではない。同じ授業科目、同じ卒業単位数、同じレベルの卒業論文提出などの要求は多くのモンゴル語母語話者学習者を悩ませている。

学校のほうも教師採用のために研究業績を重視する

傾向は年々強くなっている。その反面、教授をあまり重視しない傾向も出ている。特に基礎段階の教学の重要性を重視せず、単に就業率だけが注目される。逆にいえば、基礎が大事で、強化しないと、能力の高い人材も作れないだろう。だから、研究といっても、普通の教授によって、研究を進めれば有効だろう。

学生とのコミュニケーションがだんだん減っている現象が見られる。学生の原因もあれば、教師の原因もある。ただ教授に全力を挙げる人は准教授か教授にならないのも矛盾の一つだろう。これが原因で、普通の教授活動に関係のない論文は大量に作られている。人間として、精力も限られているので、学生とコミュニケーションする時間がほとんど取れない。

4, 改革の緊迫性

1) 留学生の増加

内モンゴル大学はグローバル化の影響で近年世界のいくつかの学校と姉妹校に結び、学生の進路を広く開けたと好評を受けている。日本を始め、アメリカなどの国に留学生を送り、人数も年々増えている。

2) 世界的な就職難

内モンゴル大学だけではなく、世界的な就職難の背景のもと、学生の能力を高めていかなければならない。日本語科ではやはり話す力で、日本語で自分の考え方や気持ちを思うように表現することができない。伝統的な文字、文法などに力を入れるだけでは、コミュニケーション力が低下し、仕事場での自信も無くしてしまう。

5, おわりに

本研究は内モンゴル大学における日本語教授法について、改革の必要性和緊迫性及び教師の資質及び指導法の改善など、自分の教えと研究によって、実生活から日本語教育効果の改善を目的として考察を行った。改革といえば、上のリーダーが幅広い方面から実行していかなければ、教師の力だけでは理想的にならない。以上の問題点を改善すれば、学習者の勉強意欲を促進し、日本語学習者により良い言語学習環境を作り、日本語学習者の言語学習効果を高めることができるにちがいない。内モンゴル大学からもっと優秀な日本語課の卒業生がたくさん出るだろう。教師ももっと積極的にやるだろう。

Received date 2012年12月26日

用例の出典：

- ①石田敏子著 (1995)「日本語教授法」大修館書店
p294
- ②石田敏子著 (1995)「日本語教授法」大修館書店
p297
- ③石田敏子著 (1995)「日本語教授法」大修館書店
p290

参考文献：

- 1, 石田敏子著 (1995)「日本語教授法」大修館書店
- 2, 内蒙古大学 (2008)「外国語学院日本語学部本科生教学計画」内蒙古大学外国語学院
- 3, 王琪编著 (2005)「日语学习心理与策略」哈尔滨工业大学出版社